

第51回 日文研フォーラム



**チャールズL.フリーア(1854~1919)とフリーア美術館**  
—米国の日本美術コレクションの一例として—

Charles L. Freer (1854~1919) and the Freer Gallery of Art  
A Collection of Japanese Art in America



清水 義明  
Yoshiaki Shimizu

---

国際日本文化研究センター



日文研フォーラムは、国際日本文化研究センターの創設にあたり、一九八七年に開設された事業の一つであります。その主な目的は海外の日本研究者と日本の研究者との交流を促進することにあります。

研究という人間の営みは、フォーマルな活動のみで成り立っているわけではなく、たまたま顔を出した会や、お茶を飲みながらの議論や情報交換などが貴重な契機になることがしばしばあります。このフォーラムはそのような契機を生み出すことを願い、様々な研究者が自由なテーマで話が出来るように、文字どおりインフォーマルな「広場」を提供しようとするものです。

このフォーラムの報告書の公刊を機として、皆様の日文研フォーラムへのご理解が深まりますことを祈念いたしております。

国際日本文化研究センター

所長 梅原 猛



● テーマ ●

チャールズ L. フリーアール (1854~1919) とフリーアール美術館  
— 米国の日本美術コレクションの一例として —

Charles L. Freer (1854~1919) and the Freer Gallery of Art  
A Collection of Japanese Art in America

● 発表者 ●

清水 義明

プリンストン大学

Dr. Yoshiaki Shimizu

Marquand Professor of Art & Archaeology, Princeton University



1993年3月9日

## 発表者紹介

清水 義明

Dr. Yoshiaki Shimizu

プリンストン大学

美術史考古学科マーカンド荣誉教授

Marquand Professor of Art & Archaeology, Princeton University

1936年東京生れ。1963年米国のハーヴァード大学卒。1968年カンザス大学より修士号取得(中国絵画研究専攻)。プリンストン大学より1971年に修士号を、1974年に博士号を取得(いずれも日本美術・考古学専攻)。1974-75年、プリンストン大学美術史考古学科講師。1975-79年、カリフォルニア大学パークレー校美術史科助教授をへて準教授。1979-84年、スミソニアン研究所フリーア美術館の日本美術担当キュレーター。1984-92年、プリンストン大学美術史考古学科教授。1992年2月よりプリンストン大学美術史考古学科マーカンド荣誉教授。

### 主な著作：

「粉河寺縁起復元への諸問題」『仏教芸術』、86号、1972年

*Japanese Ink Painting*, Co-ed. with Carolyn Wheelwright, Princeton University Press, 1976

“Six Narrative Paintings by Yin T'o-lo: Their Symbolic Content,”  
*Archives of Asian Art*, 33, 1981

*Masters of Japanese Calligraphy, 8th-19th Centuries*, with John M. Rosenfield, Asia Society/Japan Society, 1984

“The Rite of Writing: Thoughts on the Oldest *Genji* Text,” *RES*, No.16, Dept. of Anthropology, Harvard University, 1988

“The Vegetable Nirvana of Ito Jakuchu,” *Flowing Traces: Buddhism in the Literary and Visual Arts of Japan*, with LaFleur, Nagatomi and Sanford, Princeton University Press, 1992

「禪家の詩画軸－言語と絵画の関係」日本美術全集、第12巻、講談社、1992年

ワシントンにある連邦政府の一施設であるスミソニアン研究所（或は機構）の一部であるフリーアー美術館はこの数年間、開館以来初めて長期開館を余儀なくされてきました。新しく建った隣の地下の美術館サクラ・ギャラリーとの連結工事や、フリーアー美術館の倉庫、保存修理室その他の多様な機能を持った部屋の移動や、新築、増築、又は改善作業の為です。アメリカの国立美術館としては唯一の東洋美術のコレクションがフリーアー美術館にあるだけに、この閉館はかなりの人々に一種の空白感を与えることとなってしまいました。この五月九日にやっと開館が可能になったと聞いております。

本日は、この前、急に日文研の辻惟雄先生からの依頼で何か日本美術、ことに米国での日本美術に関して話をしてくれなにかとの要望があり、このフリーアー美術館の再開館にちなんで、寄贈者のチャールズ・フリーアー、特にコレクターとしてのフリーアーの人となり、また、その性格、また、フリーアーの日本美術に対する考えや蒐集方法を考えながら、フリーアー美術館の日本美術コレクションの特徴などについてお話をさせていただきたいと思えます。

日本美術の研究にたずさわる者にとって、フリーアー美術館はなじみの深い美術館なのですが、案外、フリーアー美術館が建てられたいきさつや寄贈者フリーアーの

伝記等が知られていないように思えますので、今日はこれ等二つの事に関して次の四項をとりあげて話をすすめたいと思います。

一、チャールズ・L・フリーアーの略歴と彼の時代背景

二、フリーアーの美術蒐集のきっかけ

三、フリーアーと日本との関係

四、フリーアー美術館の日本美術コレクションの特徴

十九世紀の典型的なアメリカの出世話とでも云えるのがフリーアーの生涯だっただと思えます。(註一) フリーアーは一八五四年二月二十五日、ニューヨーク州のキング

ストンという町に生まれました。フリーアーの先祖はオランダ人であるが、フランスのプロテスタント派のヒューゲノット系の人の血を受け、反宗教改革の当時(十六―十七世紀)カトリック派の迫害からのがれ、カナダ、アメリカに移民して来た人々をも先祖に持っていました。ヒューゲノット系の人々の性格とはクエーカー徒と比較され、厳格で、くそまじめで、勤勉であるとされますが、フリーアーも例外ではなかったようで、少年の頃から仕事にはげみ、キングストンの町の、ジョーン・ブロードヘッド家経営の雑貨屋の会計係の職につきました。たまたま、

この雜貨屋と同じ建物に「ニューヨーク・キングストン・シラキューズ・鉄道会社」の事務所があり、その責任者、フランク・ヘッカーという退役将校（南北戦争の頃は北軍の大佐）に見込まれます。そして一八八〇年、フリーアーが二十五才の時、ヘッカー大佐はフリーアーをデトロイトへつれて行き、「ペニスラ貨車製造会社」を設置することになります。そしてフリーアーをこの会社の会計士の補佐として雇います。

フリーアーは一生独身で通しましたが、社交家として若い頃からなかなか顔が広がったらしく、デトロイトのヨンドテガ・クラブのメンバーとして金持の若者達とのつき合いが始まります。余談ですが、精神的に一面は嚴格であるフリーアーは、他面ダンディーとしての生活も知られて居り、引退後、五十才近くになってかなり派手な社交界に、米国内、又外国で出入りしている記録があります。カプリ島（イタリア南部）に別荘を買い、それをヴィラ・カステロと名づけ、同じように独身のトーマス・ジェロームというアメリカ人と同居し、かなり派手な生活を過していたこともわかっています。

当時の若い金持連中が皆、流行<sup>はやり</sup>とでも云いますか、必ず手がけたもののなかに版画の蒐集があります。フリーアーの几帳面な性格を反映するのでしょうか、彼は

銅版画（エッチング）に興味を持ち、フレドリック・ケッペルという画商を通じて、デュラー、レンブラント、等の作品を集め出しました。こういう蒐集活動と、それに伴うつき合いを通じて、フリーアーはニューヨークの美術商ハワード・マンズフィールドと親しくなり、後者からホイットスラーの銅版画、特に彼のヴェニスを主題にした作品を買うことになります。ホイットスラーは御承知のように、アメリカの画家ですが、ロンドンで仕事をし、十九世紀末葉期のアングロ・フレンチ美術とでも云いますか、その芸術界の第一の耽美主義者として知られています。

フリーアーは丁度、ホイットスラーのようなアメリカの芸術家がかなり個性の強い作品をつくっていった時代に、コレクターとして色々な作品に親しんで行きます。この時代、つまり十九世紀末を「アメリカン・ルネッサンス」と呼ぶ人も居り、この頃フレデリック・チャーチもフリーアーと親しかった画家の一人でした。チャーチを通じてフリーアーはニューヨークのナショナル・アカデミー・オヴ・デザインと関係のある画家や他の芸術家達との面識を広げていきます。ドワイト・タイロンやトーマス・デュウイング、そしてアボット・H・セイヤー等がフリーアーのコレクションの重要な部門であるアメリカ絵画のコレクション中に優秀な作品を残しています。タイロン、デュウイング、セイヤー等の作品とはパステル調の色彩

を使用し、時にはモノクロ的な明暗の世界を描く一面があるかと思うと、金や銀の光色を連想させるような顔料の扱いもする反面もあり、「ネオ・フレンチ・ロココ」と様式が呼ばれる事もある一連の作品に代表され、それ等の作品は画題よりも画調を重んずることで知られています。後述いたしますが、これ等のアメリカの画家達の作品、特にフリーアーが自分で選ぶコレクションに加えていった一連の作品は、後年、彼が日本の美術、中国の美術を集め出す際、彼に一つの方向を示す事になります。タイロン、デュウイング、そしてホイッスラー等の典型的な作品が、油絵、水彩画でありながら、モノクローム的な水墨画を連想させる様な作品に近かったのは、フリーアーが、東西を問わず、求めていた美術品の中に何か共通のものをさがしていたからと理解出来ると思います。

一八九〇年、フリーアーが三十五才の時、彼はデトロイト市の一角に、フィラデルフィアの友人の建築士ウイルソン・アイアーに家を設計させます。この家には大きなギャラリー（絵画展示室）もついて居り、家を建てる段階では友人の画家タイロンに家の室内配色を依頼します。自分が住む家の設計から室内デザイン（配色も含め）まで、とかくうるさく注文をつけるというのは当時珍しい事ではなく、イギリスにも例があります。オスカー・ワイルドの世界がそうでした。この

現象は又、アーツ・アンド・クラフツ・ムーヴメントが当時広範囲な意味での社会美化運動として、欧米社会では真剣に実行されていた例として見て良いと思います。フリーアーもその流れに乗った人々の一人でした。

フリーアーがホイッスラーに初めて会ったのは一八九〇年の事、フリーアー三十五才、ホイッスラーは四十六才。フリーアーはホイッスラーの作品を積極的に買うアメリカ人のパトロロンとしてはその頃少い人の一人でした。二人の關係で重要なのは、ホイッスラーがコレクターのフリーアーに、東洋美術蒐集への方向づけをした事でしょう。フリーアーは当時すでに流行の浮世絵版画を集めていました。ホイッスラーに会ってまもなく、フリーアーは浮世絵木版画から手を引き、日本の焼物に手を出し始めます。フリーアー自身の言葉をかりて云うと、「ホイッスラーの絵の色調と、日本の焼物の色と表面感覚には共通するものがある」というのです。焼物の蒐集から日本の絵画へと、フリーアーはその後日本美術蒐集に集中します。フリーアーが集めた日本美術品、特に絵画は一八八七年から一九一八年の間に集められたものが大部分ですが、あれだけ日本の美術を買い求めた人にしては、フリーアーはその間買物には日本へ二度しか旅行をしていません。最初が一八九五年（四ヶ月間）、二度目が十二年後の一九〇七年（二ヶ月間）、その後一九一〇—一九一一

年に一度づつ日本に立寄っています。中国旅行の途中の寄港です。そしてこの頃までには、フリーアの個人の美術コレクションの行先がはっきりし始めて居り、数年前、一九〇六年にフリーアの全コレクションをアメリカの国有コレクションとする考えが提案され、それは十二年後に、スミソニアン機構の一部となることによって実を結ぶことになります。

ホイッスラー以外に、フリーアの日本美術蒐集活動に拍車をかけた人がもう一人居ます。それはボストン美術館の東洋部創立に貢献したアーネスト・フェノロサ（一八五三—一九〇八）です。

フェノロサの名前がここに出て来ましたがどうしてもここでつけ加えなければならぬ事があります。それは、美術品蒐集活動という分野にもタイムミングのファクターがあるという事です。よくフリーアは陶磁器を集めたエドワード・モース、フェノロサ、と同じくボストン美術館と深い縁のあるビゲロー等の人々と同時代の日本美術品のコレクターとして論ぜられる事がよくありますが、日本の美術品を蒐集するという活動に限って云えば、正確にはフリーアは、モース、フェノロサ、ビゲローに約二十年もおくれていたという事が云えます。ボストンの三人は一八七〇年代には既に日本へ来て居り、又フェノロサとビゲローは御存知の

様に一八八〇年代を通じ日本で実際に住んだ人々です。フリーアは先ほど申し上げました様に一八九五年の日本への旅が初めて、それも四カ月しか滞在していない。その次の旅行はそれよりずっと後の十二年後の一九〇七年の事、しかもそれは二カ月という短い期間でありました。その上、第一回、一八九五年の旅行と第二回、一九〇七年の訪問の際、何か目ぼしい買い物をしているかというところ、そうではない。それではフリーアのコレクション、その中核をなす諸作品はいづ集められたか、という質問が出て来るのですが、それはこの二回の旅行の間の十二年間に為し遂げられたことがわかります。そして一九〇七年以降、フリーアは中国大陸に目を向け始めます。日本美術の値段が高すぎる、というような事をフリーアは日誌に書いていますが、よく調べるとそうとは限らない。これに関しては何か他に理由があるようです。これは後述します。

さて、それでは一八九五—一九〇七年の間に集めた日本美術品（最終的には一九一八年に国立スミソニアン機構に寄付されるのですが）はどんなものだったかを見てみますと、合計七百十五点のうち、肉筆浮世絵が三百点以上、狩野派の作品が約百点、琳派が九十八点、室町水墨画が二十四点、円山・四条派二十一点、その他は各派平等に数点づつ、一番数の少ないのが南画でありまして、わずか柳

沢淇園（一七〇四―五八）が一点だけ（東京にて購入）。南画がこれ程少ないという点で、フリーアーのコレクションはボストン美術館に購入寄付されたフェノロサ・ビゲロー共同コレクションと共通したところがありますが、他の面では、この二つのコレクションは内容の点で大変性質が違うものであります。特にボストンの仏画や狩野派の絵画の質の高さと量の大きさを考える時、フリーアーの蒐集活動とその周辺の条件が、フェノロサ、ビゲロー等のボストン・チームの出会った条件とかなり違う事を想像させます。そしてフリーアーは一九〇一年にフェノロサと出会って居り、フェノロサ自身フリーアーに対して日本美術蒐集に関するアドヴァイスさえしているのにも拘らず、フリーアーが集めた品々を総括的に見てみると、当時オーソドックスと考えられていた日本美術の典型的作品とはかなり性質の違つたものであることに気がつきます。フリーアーのコレクションが異端的なものだとすればそれには大体二つの理由が考えられます。一つはフリーアーが日本美術品蒐集を始めた頃の美術品の市場の条件、もう一つはフリーアーのコレクターとしての個性です。

それでは、具体的にフリーアーがフェノロサやビゲローにおくれて日本へ美術品を求めに行った時に出会った市場の諸条件とは何だったか。そしてそれらの条件

がフリーアーにどの様なコレクションの方向づけを強いたのでしょうか。フェノロサが自分で直接「平治物語絵巻」一巻をしつこく伊勢へ出かけて行って持主とかけあって購入した事などを考えると、フリーアーは意外に日本美術の大物を探すことには消極的でした。つまり、情報をうまくつかんでいない様なのです。その背景として次の様ないくつかの事情が考えられます。

先ず第一に、日本が国家の政策として国の文化財の海外流出をコントロールし始め出したという事があります。実際には宮内庁と内務省から国の文化財流出を防ぐ法案が、一八八〇年、一八八八年、続いて一八九七年と発令されており、フリーアーがはじめて日本へ行った年には、すでに政策が打出されていたという事に注意すべきです。こういう政策が対象にしていた作品が奈良時代から大体室町時代にかけての仏画であり、水墨画であったのです。これに加えるに、この二つの部門は、一八九〇年頃までに続出した国民の個人のコレクター達によって、蒐集され始めたという事であります。

一八八〇年代を境に日本の国内でも、新華族達、また富力をもった実業家達の間から、続々と美術の収集家が出てコレクションが出来上がっていました。フリーアーが初めて日本へ行った一八九五年頃には、三菱の岩崎弥之助（一八五一—

一九〇八）が創立した静嘉堂コレクション、造船王川崎省三（一八三六一  
一九一二）がつくりあげた長春閣コレクション、三井の益田孝（一八四八—  
一九三八）の益田コレクション、根津嘉一郎（一八六〇—一九四〇）の青山荘コ  
レクション、それに横浜の原富太郎（三溪・一八六八—一九四二）のコレクショ  
ンが出来上っていたのです。一九〇七年のフリーアの二度目の日本旅行の時です  
が、四月十五日神戸に着いたフリーアは、近代化の進んでいる日本に幻滅の悲哀  
を感じ不愉快な気分にならなかつた。そのフリーアを喜ばしたのは原三溪から横浜  
へ来るようにとの招待だったと云われています。フリーアは原三溪の実家に二週  
間もの間滞在する事になり、日本の個人コレクションの真蘂なるものをゆっくり  
鑑賞体験することになるのですが、ここで注意すべきは、原三溪のコレクション  
のレベルが高いこともさることながら、この頃の日本には先述した屈指の個人コ  
レクター同志の人脈が出来上っているのみならず、これ等のコレクターの家に出  
入りをする骨董屋、ディーラー達の一団、つまり美術蒐集の市場の存在と、需要  
と供給の関係をつくるプロのネットワークが出来上っていたことです。フリーア  
は原三溪を通じて川崎コレクションその他の個人コレクションを見、また、コレ  
クター達に会えたのですが、このことは、この世界の仲介人の存在の重要性をフ

リアーに教えたに違いありません。また、原三溪と親しくつき合いが始まるという背景には、リアーを原三溪に会わせた仲介人が居たわけで、その仲介人がリアーの前からの知人、横浜のグラランド・ホテルのオーナー、また、横浜商工会議所会頭でもあり、美術商「サムライ商会」の主人―即ち、その当時の国際的ビジネスマン野村洋三であった事は偶然では無いように思えます。余談ですが、日本と欧米の両世界で第二次大戦後エネルギーに日本美術品を買集め、ニューヨークのメトロポリタン美術館に数百点のつづ選りの美術作品を寄付購入させたハリー・パッカー氏が終戦後進駐軍の将校として来日、日本美術の蒐集活動を始めた頃、彼と日本の美術市場の間に立ち仲介人の役をつとめた数人の日本人の中に、先の野村洋三の息子野村光政氏が居ます。このように二代にわたってアメリカ人の日本美術蒐集家とのつながりをつくる人が出るという背景には、人脈をつくらなければ仕事組織だって進められない、という日本の特殊な社会事情が、比較的新しい民間の美術蒐集の世界にも出来上っていたことを示していると思います。リアーの第一回日本旅行の一八九五年に「東京美術倶楽部」(ディラーの団体)が創立され、そのひんばんに行われる美術品のオークション(入札会)はこの「クラブ」に独占されることとなります。この日本の美術品のオークションとは、

欧米のクリスティやサザビーの公開オークションと比べてはならない特殊なオークションであり、このオークションの閉鎖的性格は現在に至るまで残っています。つまりフリーアーが、少なくとも二度目の旅行で日本に来た時には、外国人による日本美術の蒐集という活動は、フェノロサやビゲロー達がそれより二十年も前に出来たような野放し状態で開放的なものではなかったという事です。

フリーアーの一九〇七年の日本旅行は期間は短かったが、自分の目で日本の個人コレクション（少なくとも十二ヶ所）を見、それ等コレクションの内容の量と質をまざまざと見せられたという点で大変な勉強になったと自分自身認めているのですが、それと同時にフリーアーはこれ等コレクションの内容のパターンを見出します。それは日本人がオーソドックスとしてみている仏教美術と室町の水墨画等は、すでにふるいにかけられ、つぶ選りのものは既に市場に簡単にはみられないという事、そしてもう一つ、それは日本のプライベート・コレクションの中には、或る限られた数の江戸初期の風俗画屏風を除いて、浮世絵、特に美人画を集めているのが一つもないという事です。

フリーアーが見た日本と、フェノロサ達が二十年も前に見た日本との違いに、もう一つ重要な要素があります。それは非常なスピードで為し遂げられつゝあった

日本の工業化、西洋化、近代化に伴って、日本の公的な文化施設である国立博物館なるものが、日本の伝統文化を保存する必要から設立されていた事であります。東京では国立博物館の前身なるものが一八八二年に既に設置せられ、それを追うように奈良に奈良博物館が一八九五年に、そして京都には一八九七年に創立されています。国家によるこのような文化財展示場の設立は、日本の近代化の過程での表裏の關係にある**変・化・と・保・存・と・継・続・と・断・絶**という文化史上のディレンマに應じる対策とも考えられます。近代企業、工業界の指導者達が、即ち美術のコレクター達であったという事自身、日本の変化しつつある文化に対する反省の表現ともとらえる事が出来、またこの事は岡倉天心（一八六二—一九一三）やフェノロサによる美術同人会の結成（観画会等）や、一八八九年十月に発刊された美術機関誌「国華」第一号（英国の「バーリントン・マガジン」と同じ年）等と同じような時代の象徴ととれると思います。このようにみえてくると、フリーアの二回目の日本旅行はフリーアにとってはかなりショックだったに違いないのですが、フリーアはビジネスマンであるだけ、プラグマチックな面が強かったのでしょうか。原三溪のコレクションを充分に鑑賞し、そこに蒐められている優秀な作品の数々には賛美の言葉を惜しんでいません。そしてこれ等のコレクション、また同人会や、そ

の機関誌が多種多様の主張の中で共通に認めざるを得なかった日本文化の和と漢の伝統の二重性の問題とか、日本とアジアの統一性とか、岡倉にせよ、フェノロサにせよ矛盾を感じながらも日本文化の祖先を中国大陸に、また仏教を伝えたインドに求めるといふような行為には全く無頓着なように、フリーアーはこの後、浮世絵の美人画、そして町人の芸術家宗達・光琳、即ち琳派の作品を或る特定のディーラーを通じ追求し買っていったのです。(このディーラー達については後述)。一つの理由として、仏教美術、特に仏画や、古狩野の作品に比べて浮世絵は安く手に入るからというフリーアーのプラグマチズムがあるのですが、自分の美的感覚を信用してコレクションを作りあげるといふ信念をつらぬいた人がフリーアーであるといえるでしょう。ただフリーアーの日本への二回目の旅―一九〇七年―以降の彼の蒐集活動の重心は中国へと傾きます。この変化はフリーアーが自分の旅日誌に度々日本のインフレ状態に不満であると書いているように、美術品の値段とも無関係では無かったかも知れませんが、フリーアー自身の「日本に対する失望」もあったと思えます。フリーアーはホイットスラー等に云われて日本の美術、また文化を桃源境の様なイメージとしてとらえようとしていた。その蒐集活動の初期が一八九〇年でありました。そしてその最盛期が一九〇七年です。この間の期間は歴史的に

日本が大いに変わった時代です。一八九五年の日清戦争と一九〇五年の日露戦争での二つの勝利・・・フリーアーは友人である画家のタイロン宛に書いた手紙で次の様に述べています。

「・・・十三年前私はアメリカへ向って涙を流して帰ったものです。でも今は何たる変わり方か！見て信じられない事が起きています。大きな倉庫が立並び、巨大な煙突が天を突き並び、造船所や製鉄所の炉がたくさん、ばかどかい西洋式のホテルが出来上りつつある。ここには十三年前小さな庭園があり、かわい、簡素な庵が波止場まできちんと列をなして建っていたものです。当時はまだきれいな空を鳥が飛んでいた。日本人はおとなしく、礼儀正しかった。今は煤煙に満ちる空気、機械のうるさい雑音、そしてうるさい群衆―この変化をみるとはき氣がする。」

このタイロンへの手紙で感じられるフリーアーの近代化の進む日本に対する嫌悪感、フリーアーの日本の伝統美術や文化に対する純粹主義ともとられますが、個性の強い、或いは好き嫌いをはっきり表現する一人の aesthete (耽美主義者) の現実の世界との接触体験の限界も示していると思えます。

先にふれたように、一九〇七年以降フリーアーの蒐集活動は中国美術に重心が置

かれる様になります。もともと日本美術品の購入を中止したわけではなく、個々の購入は個人のディーラーを通じて続けています。フリーアの生涯を通じて東洋美術購入に関して重要な役割を果たした多くのディーラーが居ますが、これ等の「美術品供給者」は、大きく分けて欧米人と日本人との二つのグループがあります。前者にはパリを根拠地として活躍したサムエル・ビング（一八七八—一九〇五）が居り、フリーアは元信の扇面等を一九〇四年に彼から購入しています。その他にはニューヨークをベースにして特に浮世絵関係のものをあつかったマイケル・トムキンソンが居り、記録によると九十五点もの作品をフリーア・コレクションに入れていきます。そしてもう一人。これは意外に思われるかも知れませんが、フリーアに大変レベルの高い作品を三十二件も売ったのがボストンのフェノロサです。フェノロサは一八八六年頃まで個人のコレクションとしてかなり優秀な作品を持っていました。一八九二年頃、離婚を経たフェノロサはボストン美術館のアジア部主任の職を辞めるわけですが、離婚に関して財産整理の必要上フリーアに自分のコレクションの一部を買上げてもらっています。（ちなみに、フェノロサに代ってアジア部主任キュレーターに岡倉天心が三年後、一八九五年に就任します。）これ等の人々のほかに日本人で積極的にフリーアコレクションに作品を売った

ディーラーが三人います。これ等のディーラーは年令的に若く、大正―昭和まで生きた人々です。そのまず一人は山中商会の山中定二郎（一八六三―一九三六）、二人目は松本文恭（一八六七―一九四〇）そして三人目が小林文七（一八六一―一九二二）で、これ等三人は特筆に値するディーラーです。フリーアーは彼等からどういうものを購入したか、数例の作品を観てみましょう。

一八八八年、高野山金剛峯寺の子院西宝院が火事で全焼した時、奇跡的に取出され、火難を逃れた仏画「閻魔天曼荼羅」が一九〇四年に山中から購入されています。高野山から仏教美術品が流出したという例は他にも沢山あり、先述の原三溪のコレクションの中にも「孔雀明王図」があり、原三溪が高値で井上馨から購入した話は有名で、現在は東京国立博物館の至宝の一つになっています。この他、同じ年に土佐派の「源氏物語図屏風」一双を山中から購入していますが、この屏風は在外の土佐派の作品の中でもコンディションが良い事と、作品の様式的レベルの高い事で屈指の作品で、最近の研究では土佐光起（一六一七―一六九一）の筆に帰する説が強くなっています。そして他にも色々購入品で面白い作品があるのですが、特記に値するのが鎌倉の建長寺で室町初期（十五世紀初期）に活躍した仲菴真康という禅僧で水墨画をたしなんだ作者による禅宗の肖像画（半身像）

「高峯原妙像」を一九一一年に山中から購入しています。高峯原妙は中国の禅僧で、南宗末から元の初期にかけて個性のある禅の試鍊で知られているだけでなく、弟子に中峯明本という高僧を出して、明本は十何人かの日本人の弟子を出した人で、この肖像画（禅宗では頂相と云う）は渡来の原本（恐らく法雲寺にあるもの）に依ったと思われるが、この種の高峯の頂相は日本には残っていません。

フリーアー美術館に寄贈されたもとフリーアーの個人コレクションの中に、松木文恭と小林文七から購入した作品が水墨画や琳派のものにかなりあります。初期水墨画が発展した十四世紀（南北朝時代）の画師良全による十六羅漢図は数少ない彼の優秀な作品として、京都の建仁寺にあるセットと共に重要なものです。もと東福寺の塔頭（今は廃寺）三聖寺にあった事がわかっています。このフリーアーのセットは今、全幅京都に里帰り中で、各幅とも専門家によって修理中です。一九〇四年の購入ですから、九十年ぶりに京都の空気にさらされたわけです。

この他に日本に数少ない作品でフリーアーが購入したものとして特筆に値する作品では、岳翁藏丘の山水図です。周文の弟子として文献に名を残している、まれな画師の例ですが、フリーアーはこれを一九〇五年に松木から購入しています。様式的にこの作品と同期と思われる作品が大阪の正木美術館にあります。海外に

出た唯一の岳翁として貴重です。

この松木文恭の人となりに関しては、浮世絵の機関誌 *UKIYO E ART* に村形明子氏の詳しい研究論文（一九八〇年）があります。（註<sup>一</sup>）一八八八年にアメリカへ渡った松木文恭はボストンのボイルストン街に店を持ち、セーラムの町に住む事になります。もともと京都の骨董商の家に生れた松木は正式に仏教の僧でもありません。若い頃中国の古典に親しみ、また英語の習得が早く、上海と北京に二年留学したという経歴をもっています。フリーアートのつき合いは一九八六年以来からあり、他に光琳の杉戸、光悦・宗達の「扇面散し屏風」一双、又浮世絵関係では菱川師宣の「上野の桜・浅草の秋」と題する屏風一双が一九〇六年に購入されています。ボストン美術館にはこれより二十一年前にフェノロサ、ビゲローによって同じ師宣の「吉原・中村座」の屏風一双が購入され、欧米にあるつづ選りの浮世絵風俗画の双壁と云われています。このボストンの屏風に関しては同美術館のマニー・ヒックマン博士の一九七八年の詳しい研究論文があります。（註<sup>二</sup>）

さて、時間の都合でそろそろけじめをつけなければならぬ段階にきましたが、フリーアー・コレクションを語る際に、見逃せないのは宗達の「松島図」屏風一双です。一九〇六年にフリーアーが小林文七から購入した大作です。この屏風の構図

は江戸末期から広く知られて居り、光琳の写しと云われる作品で、フェノロサが購入したものがボストン美術館に既にあった。それを知ったフリーアーが小林文七に「こんな屏風をさがせ」といったと云い伝えられています。フリーアーの一双は宗達の屏風のレパトリーでは屈指の作品と云われています。ちなみに故田中一松先生の説に依りますと、宗達の一流現存屏風が五点ある。一つは醍醐寺の「舞楽屏風」、一つは静嘉堂の「源氏物語屏風」、一つは建仁寺の「風神雷神屏風」、残りの二つはフリーアーの水墨画の「雲龍図屏風」一双とこの「松島図屏風」である。

フリーアーは生存中、一九〇六年に自分のコレクションを公共の施設に寄附する案を具体化すべく、当時のアメリカ大統領セオドア・ルーズヴェルト（任期期間一九〇一—一九〇九）に話を持って行きます。一九一八年には正式に国立の施設であるスミソニアン機構の一部として「米国市民への贈物」になります。惜しいかな、フリーアーは自分が自ら積極的に美術館の建設工事に関り合ったにも拘らず、一九二三年の美術館竣工を見ずしてその四年前に他界します。

フリーアーが生存中、直接自分で購入した諸作品が土台となり、その後も歴代のフリーアー美術館のキュレーター、ロッジ、ポープ、スターン等によってフリーアー

没後も日本美術品が加えられて行きました。この間、最も積極的な買物をしたのが第二次大戦後の時代のポープ氏とスターン氏だったと思います。それはこの時期に、国の事情もあって、一時日本美術品市場が再び開放的になった事に由来しています。然しながら、その当時からフリーアー美術館も含めて、アメリカの購入者側の日本観、日本文化や美術品に対する態度が根本的に十九世紀末期のフェノロサからフリーアーまでのコレクター達のものとは違って来ています。それは日本美術を蒐める美術館のスタッフが前時代に比べてはるかに学問的な知識をかまえるようになった事が一つ、また公共の美術館と並行して出て来る個人コレクターも、個性による作品の選択をしながら、同時に日本の美術史の専門家達と意見と知識の交流を活発に行ってきたという事が原因になっていると思います。そしてもっと重要なことは、フェノロサやフリーアーが考えていた中国と日本を「アジア」という観念の傘下に置いて、美術品もそれと同様、歴大な宇宙観によって抽象化し、理想化したものであったのに代って、中国美術と日本美術は根本的に異質なものであるという前提が、欧米のコレクターも含めた知識人の間で受入れられ始めた事だと思えます。現在では、中国や日本を真剣に研究する人々にとっては、言語の壁が無くなったと云えるばかりでなく、各大学のアカデミックな組織内で

は、日本美術と中国美術はそれぞれ一人づつ専門家を置くのが通常であります。そういう現在の地点からフリーアー美術館創立当時のコレクションの多様な内容―即ち日本美術、中国美術、アメリカ美術、韓国美術、ムガールのミニアチュール、エジプトのガラス器、ビザンチン美術等が混沌としてあることを振返って見る時、かなり破格的なコレクションであるとの感は免れません。それはフリーアー自身の個性を反映していると同時に、コレクターとしてのフリーアーを産んだ時代、十九世紀の後半、即ちアメリカの文豪マーク・トゥエインの言葉を借りれば、「ギルデッド・エイジ」(「金ピカの時代」とでも訳しますか)の混沌とした好況時代の反映でもあったと思います。フリーアー美術館の一室にホイッスラーがデザインし、又自ら筆を執って画いた「ピーコック・ルーム」というのがありますが、もとはフリーアーの自宅の食堂でありました。その部屋は天井から壁のパネルまで藍と金の色で塗られ、孔雀の絵が描かれ、壁のパネルを覆うように棚がつくられ、そこには中国の青の染付の磁器(藍模様をつけた陶器)がずらりと置かれ、ファイア・プレースの上の壁にはホイッスラーの油絵、自分の愛人の若い女性に日本の着物を着せた絵ですが、それがかかっています。この部屋の空間こそフリーアーの個性を表現した空間であり、彼の時代の象徴とも云える空間でもあります。そしてこ

ういう空間を再現する事はもう不可能といえると思います。何となれば「ギルデッド・エイジ（金ピカの時代）」と同じく、コレクター、フリーアーを可能にした時代、即ち米国の富の全体の九割が全人口のわずか〇・四割にあたる富める人々の個人財産であった時代、は既に過ぎ去ったものであるからです。

註一 フリーアーの伝記は英語でも日本語でも活字になってまとまったものは未だ無い。英文で博士論文として提出されたのに次の労作がある。Helen Nebeker Tomlinson, *Charles Lang Freer, Pioneer Collector of Oriental Art*, (Case Western Reserve Ph.D. Thesis), 1982, 2 Vols. その他は Apollo, Vol. CXVIII, No. 258, August 1983 の特集と Denys Sutton, ed., *Charles Lang Freer as a Connoisseur* がフリーアー美術館の要員による多角度から見たフリーアー・コレクションの性格と内容について論じている。この拙稿はこの特集号に負うところが多い。筆者もこの特集号の執筆者の一人である。

註二 村形明子「日美法師―松本文恭のこと」、『浮世絵芸術』第六十六号、一九八〇、第三―十二頁。

註三 Money Hickman, "View of the Floating World," *Bulletin of the Museum of Fine Arts Boston*, 76, 1978, pp. 4-33

\*\*\* 発表を終えて \*\*\*

ボストンのフェノロサやビゲロー、デトロイトのフリーア一等が日本の伝統美術品の蒐集をはじめた頃から、もうすでに百年以上が過ぎました。有名な日本美術の海外でのコレクターとして、これ等の人々の再評価がなされるべき時期でもあります。プリンストン大学から休暇が与えられ、日本へ一時帰って居ります間、日文研での講演の話が出、急な事で困ったのですが、たまたま一年程前に「アメリカにおける日本美術のコレクション」という題で講演をした時の英文の原稿が手元にあったのをもとにして日本版に書き直しました。旅先での文筆活動にも拘らず聴衆の皆様のご関心がはげみとなりました。普通は日本の文化、或いは日本人を欧米の人々に説明する役割なのですが、今回は欧米文化の一端と一人のアメリカ人に関して、日本の皆様にお話をさせていただくことになりました。この機会をつくって下さった日文研の皆様、とくに臼井祥子専門官と講演の際コメントをされた別役教授にお礼を申し上げます。





日文研フォーラム開催一覧

○は報告書既刊

回	年月日	発表者・テーマ
1	62.10.12 (1987)	アレッサンドロ・バロータ (ピサ大学助教授) Alessandro VALOTA 「近代日本の社会移動に関する一、二の考察」
2	62.12.11 (1987)	エンゲルベルト・ヨリッセン (日文研客員助教授) Engelbert JORI ßEN 「南蛮時代の文書の成立と南蛮学の発展」
③	63. 2.19 (1988)	リー A. トンプソン (大阪大学助手) Lee A. THOMPSON 「大相撲の近代化」
4	63. 4.19 (1988)	フォスコ・マライーニ (日文研客員教授) Fosco MARAINI 「庭園に見る東西文明のちがい」
⑤	63. 6.14 (1988)	宋 彙七 (慶北大学校師範大学副教授) SONG Whi Chil 「大塩平八郎研究の問題点」
6	63. 8. 9 (1988)	セップ・リンハルト (ウィーン大学教授) Sepp LINHART 「近世後期日本の遊び—拳を中心に—」
⑦	63.10.11 (1988)	スーザン J. ネイピア (テキサス大学助教授) Susan NAPIER 「近代日本小説における女性像—現実と幻想—」
⑧	63.12.13 (1988)	ジェームズ C. ドビンス (オベリン大学助教授) James C. DOBBINS 「仏教に生きた中世の女性—恵信尼の書簡—」

⑨	元. 2.14 (1989)	嚴 安生 (北京外国語学院日本語学部助教授) YAN An Sheng 「中国人留学生の見た明治日本」
⑩	元 4.11 (1989)	劉 敬文 (遼寧大学日本研究所副所長) LIU Jingwen 「教育投資と日本の戦後経済高度成長」
⑪	元. 5. 9 (1989)	スザンヌ・ゲイ (オベリン大学助教授) Suzanne GAY 「中世京都における土倉酒屋－都市社会の自由とその限界－」
⑫	元. 6.13 (1989)	夏 剛 (京都工芸繊維大学助教授) HSIA Gang 「インタビュー・ノンフィクションの可能性－猪瀬直樹著『日本凡人伝』を手掛りに－」
⑬	元. 7.11 (1989)	エルンスト・ロコバント (東洋大学助教授) Ernst LOKOWANDT 「国家神道を考える」
⑭	元 .8. 8 (1989)	キム・レーホ (ソ連科学アカデミー・世界文学研究所教授) KIM Rekho 「近代日本文学研究の問題点」
⑮	元. 9.12 (1989)	ハルトムート O. ローターモンド (フランス国立高等研究院教授) Hartmut O. ROTERMUND 「江戸末期における疱瘡神と疱瘡絵の諸問題」
⑯	元.10. 3 (1989)	汪 向榮 (中国中日関係史研究会常務理事・日文研客員教授) WANG Xiang-rong 「弥生時期日本に来た中国人」
⑰	元.11.14 (1989)	ジェフリー・ブロードベント (ミネソタ大学助教授) Jeffrey BROADBENT 「地域開発政策決定過程を通してみた日米社会構造の比較」

⑱	元.12.12 (1989)	エリック・セズレ (フランス国立科学研究所助教授) Eric SEIZELET 「日本の国際化の展望と外国人労働者問題」
⑲	2. 1. 9 (1990)	スミエ・ジョーンズ (インディアナ大学準教授) Sumie JONES 「レトリックとしての江戸」
⑳	2. 2.13 (1990)	カール・ベッカー (筑波大学哲学思想学系外国人教師) Carl BECKER 「往生－日本の来生観と尊厳死の倫理」
㉑	2. 4.10 (1990)	グラント K. グッドマン (カンザス大学教授・日文研客員教授) Grant K. GOODMAN 「忘れられた兵士－戦争中の日本に於けるインド留学生」
22	2. 5. 8 (1990)	イアン・ヒデオ・リービ (スタンフォード大学準教授・日文研客員助教授) Ian Hideo LEVY 「柿本人麿と日本文学における『独創性』について」
23	2. 6.12 (1990)	リヴィア・モネ (ミネソタ州立大学助教授) Livia MONNET 「村上春樹：神話の解体」
㉒	2. 7.10 (1990)	李 国棟 (北京連合大学外国語師範学院日本語学部講師) LI Guodong 「魯迅の悲劇と漱石の悲劇－文化伝統からの一考察－」
㉓	2. 9.11 (1990)	馬 興国 (遼寧大学日本研究所副所長・日文研客員助教授) MA Xing-guo 「正月の風俗－中国と日本」
㉔	2.10. 9 (1990)	ケネス・クラフト (リハイ大学助教授) Kenneth KRAFT 「現代日本における仏教と社会活動」

27	2.11.13 (1990)	アハマド M. ファトヒ (カイロ大学講師) Ahmed M. FATTHY 「義経文学とエジプトのベールス王伝説における主従関係の比較」
28	3.1.8 (1991)	カレル・フィアラ (カレル大学日本学科長・日文研客員助教授) Karel FIALA 「言語学からみた『平家物語・巻一』の成立過程」
29	3.2.12 (1991)	アレクサンドル A. ドーリン (ソ連科学アカデミー東洋学研究所上級研究員) Aleksandr A. DOLIN 「ソビエットの日本文学翻訳事情－古典から近代まで－」
30	3.3.5 (1991)	ウイーベ P. カウテルト (ワーゲニンゲン大学研究員) Wybe P. KUITERT 「バロック・ヨーロッパの日本庭園情報 －ゲオルグ・マイステルの旅－」
31	3.4.9 (1991)	ミコワイ・メラノヴィッチ (ワルシャワ大学教授・日文研客員教授) Mikołaj MELANOWICZ 「ポーランドにおける谷崎潤一郎文学」
32	3.5.14 (1991)	ベアトリス M. ボダルト・ベイリー (オーストラリア国立大学リサーチフェロー・日文研客員助教授) Beatrice M. BODART-BAILEY 「三百年前の京都－ケンペルの上洛記録」
33	3.6.11 (1991)	サトヤ B. ワルマ (ジャワハルラール・ネール大学教授・日文研客員教授) Satya. B. VERMA 「インドにおける俳句」
34	3.7.9 (1991)	ユルゲン・ベルント (フンボルト大学教授・日文研客員教授) Jürgen BERNDT 「ドイツ統合とベルリンにおける森鷗外記念館」

③⑤	3. 9.10 (1991)	ドナルド M. シーキンス (琉球大学助教授) Donald M. SEEKINS 「忘れられたアジアの片隅－50年間の日本とビルマの関係」
③⑥	3.10. 8 (1991)	王 曉平 (天津師範大学助教授・日文研客員助教授) WANG Xiao Ping 「中国詩歌における日本人のイメージ」
③⑦	3.11.12 (1991)	辛 容泰 (東国大学校文科大学教授・日文研来訪研究員) SHIN Yong-tae 「日本語の起源 －日本語・韓国語・甲骨文字との脈絡を探る－」
③⑧	3.12.10 (1991)	洪 潤植 (東国大学校教授) HONG Yoon Sik 「古代日本佛教における韓国佛教の役割」
③⑨	4. 1.14 (1992)	サウィトリ・ウィシュワナタン (デリー大学教授・ 日文研客員教授) Savitri VISHWANATHAN 「インドは日本から遠い国か？－第二次大戦後の 国際情勢と日本のインド観の変遷－」
40	4. 3.10 (1992)	ジャン = ジャック・オリガス (フランス国立東洋言語文化研究所教授) Jean-Jacques ORIGAS 「正岡子規と明治の随筆」
④①	4. 4.14 (1992)	リブシュ・ボハーチコヴァー (プラハ国立博物館日本美術 元キュレーター・日文研客員教授) Libuše BOHÁČKOVÁ 「チェコスロバキアにおける日本美術」
42	4. 5.12 (1992)	ポール・マッカーシー (駿河台大学教授) Paul McCARTHY 「谷崎文学の『読み』と翻訳：アメリカにおける 最近の傾向」

43	4. 6. 9 (1992)	G. カメロン・ハーストⅢ (ニューヨーク市立大学リーマン 広島校学長・カンザス大学東アジア研究所長) G. Cameron HURST Ⅲ 「兵法から武芸へー徳川時代における武芸の発達ー」
44	4. 7.14 (1992)	杉本 良夫 (オーストラリア・ラトロップ大学教授) Yoshio SUGIMOTO 「オーストラリアから見た日本社会」
45	4. 9. 8 (1992)	王 勇 (杭州大学日本文化研究センター教授・日文研 外国人研究員) WANG Yong 「中国における聖徳太子」
④⑤	4.10.13 (1992)	李 栄 九 (大韓民国中央大学教授・日文研客員教授) LEE Young Gu 「直観と芭蕉の俳句」
④⑦	4.11.10 (1992)	ウィリアム D. ジョンストン(米国ウェスリアン大学助教授・ 日文研客員助教授) William D. JOHNSTON 「日本疾病史考 - 『黴毒』の医学的・文化的概念の形成」
48	4.12. 8 (1992)	マノジュ L. シュレスト (甲南大学経営学部講師) Manoj L. SHRESTHA 「アジアにおける日系企業の戦略転換 ー技術移転をめぐるー」
④⑨	5. 1.12 (1993)	朴 正義 (圓光大学校師範大学副教授・日文研来訪研究員) PARK Jung-Wei 「キリスト教受容における日韓比較」
50	5. 2. 9 (1993)	マーティン・コルカット (米国プリンストン大学教授・日文研客員教授) Martin COLLCUTT 「伝説と歴史の間ー北條政子と宗教」

⑤1	5. 3. 9 (1993)	清水 義明 (米国プリンストン大学マーカンド荣誉教授) Yoshiaki SHIMIZU 「チャールズ L. フリアー (1854~1919) とフリアー美術館 -米国の日本美術コレクションの一例として-
⑤2	5. 4.13 (1993)	金 春美 (高麗大学教授・来訪研究員) KIM Choon Mie 「近代日本知識人の思想と実践-有島武郎の場合-
53	5. 5. 11 (1993)	タキエ・スギヤマ・リブラ (ハワイ大学教授) Takie SUGIYAMA LEBRA 「皇太子妃選択の象徴性 -旧身分文化との関連を中心として-
54	5. 6. 8 (1993)	姜 希雄 (ハワイ大学教授・日文研客員教授) H.W.KANG 「変革と選択 : 10世紀の日本と朝鮮 -科学制度をめぐる-
55	5. 7.13 (1993)	ツベタナ・クリステワ (ソフィア大学教授・日文研客員教授) Tzvetana KRISTEVA 「涙の語り - 平安朝文学の特質-
⑤6	5. 9.14 (1993)	金 容雲 (漢陽大学教授・国際日本文化研究センター客員教授) KIM Yong-Woon 「和算と韓算を通してみた日韓文化比較」
⑤7	5.10.12 (1993)	オ洛夫 G. リディン (コペンハーゲン大学教授・ 日文研客員教授) Olof G. LIDIN 「徳川時代思想における荻生徂徠」
⑤8	5.11. 9 (1993)	マヤ・ミルシンスキー (スロベニア・リュブリアナ大学助教授・ 日文研客員助教授) Maja MILČINSKI 「無常観の東西比較」

59	5.12.14 (1993)	ウィリー・ヴァンドゥワラ (ベルギー・ルーヴァン・カトリック大学教授・日文研客員教授) Willy VANDE WALLE 「日本・ベルギー文化交流史 -南蛮美術から洋学まで-」
60	6.1.18 (1994)	J. マーティン・ホルマン (ミシガン州立大学連合日本センター所長) J. Martin HOLMAN 「自然と為作 -井上靖文学における『陰謀』-」
61	6.2.8 (1994)	マイヤ・ゲラシモワ (ロシア科学アカデミー東洋学研究所研究員) Maya GERASIMOVA 「外から見た日本文化と日本文学 -俳句の可能性を中心に-」
62	6.3.8 (1994)	オギュスタン・ベルク (フランス・社会科学高等研究院教授・日文研客員教授) Augustin BERQUE 「和辻哲郎の風土論の現代性」
63	6.4.12 (1994)	リチャード・トランス (オハイオ州立大学助教授) Richard TORRANCE 「出雲地方に於ける読み書き能力と現代文学, 1880 ~ 1930」

\*\*\*\*\*

発行日 1994年5月27日  
編集発行 国際日本文化研究センター  
京都市西京区御陵大枝山町3-2  
電話 (075) 335-2048

問合せ先 国際日本文化研究センター  
管理部・研究協力課

\*\*\*\*\*

1993 国際日本文化研究センター





■ 日時

1993年3月9日(火)

午後2時～4時

■ 場所

国際交流基金 京都支部

